

# 学 位 請 求 論 文 要 旨

中国日本語専攻大学生における異文化接触の持続の  
ためのコミュニケーション能力  
——異文化接触のプロセスを通して——

2019 年 1 月

城西国際大学大学院 人文科学研究科  
比較文化専攻

高希敏

本研究は、中国ホストの日本語専攻大学生における対日異文化接触に焦点を当て、異文化接触の現状を明らかにしたうえで、そのプロセスを解明し、さらに解明されたプロセスに基づき、異文化接触を持続するためのコミュニケーション能力を探究したものである。本研究は、中国の日本語専攻大学生における異文化接触の実際をより総合的に認識するための基礎的研究であり、また、異文化接触を持続するためのコミュニケーション能力を同定することで、異文化間コミュニケーション能力を持った人材育成を唱えている中国の日本語教育に有意義な示唆を与え、日本語専攻大学生における異文化接触を支援・サポートするものでもある。

本研究は全7章から構成されている。

第1章では、研究の背景・問題の所在・研究目的・研究課題を提示した。研究目的は、中国の日本語専攻大学生における異文化接触はどのようなものかを認識できるように記述すること、および中国における日本語専攻大学生が異文化接触を持続するためのコミュニケーション能力を同定することであるが、研究目的を敷衍して、研究課題を(1)中国の日本語専攻大学生における異文化接触の現状はどうであるか、(2)彼らの異文化接触のプロセスはどのようなものか、(3)彼らの異文化接触の持続を可能にするコミュニケーション能力はどのようなものかの3点に細分化した。

第2章では、先行研究の概観を行い、本研究の位置づけを示した。本研究は、その性格を、外国語教育の視点からアプローチした日中間の異文化間コミュニケーション研究として位置づけることができる。本章では、異文化間コミュニケーション能力・日中間の異文化間コミュニケーション・異文化間コミュニケーションの情意的要素の3点に関する先行研究を踏まえ、従来の研究と異なる本研究の特徴を提示した。

第3章では、中国の日本語専攻大学生における異文化接触の現状を解明した。中国遼寧省大連市に位置する2大学に在籍中の111名の日本語専攻大学生の協力を得、接触の、経験の有無や持続状況、およびその対象・場・期間・主な内容に関して自由記述による調査を行った。その結果として、以下の3点を挙げる。①異文化接触が多く日本語専攻大学生によって実施されている。②接触経験者のうち、持続している学習者が約半数を占めているが、持続していない学習者も少なくない。③接触の、対象・場が大学の位置する環境やその国際交流政策に依存し、さらにその環境や政策に依存した接触の、対象・場によって接触の期間・頻度がパターン化を見せている。接触の主な内容に関しては、日本の文化や日中文化の相違点に関する話題が多く取り上げられている。

第3章では、中国の日本語専攻大学生における異文化接触の現状を事象的に捉えたが、それは外側からの視点にとどまっており、異文化接触の内側には踏み込んでいない。特に、持続している学習者がどうやって持続しているのか、持続していない学習者がどうして持続していないのか、両者の間にどのような差異があるのか、それを探究する必要がある。しかも、実際の異文化接触は一つのプロセスであり、ダイナミックな存在である。そのため、異文化接触の中に一步踏み込んで、そのプロセスの実態がどうなっているのかを究明

する必要がある。そこで、本研究は、大連市にある4大学に在籍中の20名の異文化接触経験を持つ日本語専攻大学生を協力者として半構造化インタビュー調査を行い、M-GTA（修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ）によるデータの収集と分析を行った。

第4章では、上記のインタビュー調査の概要、および研究方法としてのM-GTAの選択理由を述べた。本章では、グラウンデッド・セオリーとはどんな理論なのか、GTAはどんな研究に適しているのかについて述べ、さらにM-GTAの主要特性を確認することで、M-GTAが、本調査で取り組む異文化接触の実態研究に適した方法である理由を明らかにした。

第5章では、中国の日本語専攻大学生における異文化接触のプロセスに対する記述を行った。日本語専攻大学生は、接触前、【動機づけ】を持ち、【チャンスの獲得】を通して接触を開始する。接触中、【困難】に遭遇しつつも、【努力と工夫】を通してそれらに対応している。日本語専攻大学生が【困難】と【努力と工夫】を経験している一方で、そこにはく接触に対する相手の関与姿勢も関わってくるため、接触中には、この3者が相互に作用する。その結果、異文化接触の【効果】が現れる。しかし、【効果】が顕在化されていないときは、【困難】に挫折してくあきらめ>に陥ることもあり、また、【効果】が徐々に現れた後で、【努力と工夫】をしても【困難】が解決できず、くあきらめ>てしまうこともある。他方、接触の【効果】が現れ、その【効果】の促進作用で、く異文化接触の持続と拡大>を果たしていくような例も見られる。しかし、異文化接触のプロセスは、く異文化接触の持続と拡大>をもって終結するのではなく、接触の持続中、【困難】・【努力と工夫】・く接触に対する相手の関与姿勢>・【効果】からなる過程がまた繰り返される。また、接触の経験が蓄積されていくとともに、持続中の接触の質も高くなると予測されるため、【困難】・【努力と工夫】・く接触に対する相手の関与姿勢>の3つと【効果】がスパイラルな形で高まっていく。本研究は、M-GTA研究方法を用いて、中国日本語専攻大学生の、中国語教室・大学・日本料理店という多様な文脈における異文化接触のプロセスについて具体的な記述を行い、中国の日本語専攻大学生における異文化接触の実態の一般性を求めた。

第6章では、第5章において明らかにした中国の日本語専攻大学生における異文化接触のプロセスに基づき、異文化接触を持続するために、どのようなコミュニケーション能力が必要かを検討した。その結果、「ネットワークの構築能力」・「意思疎通をはかるためのコミュニケーション能力」・「対人関係構築能力」・「異文化間能力」という4つのコミュニケーション能力を同定した。従来取り扱われてきた「異文化間コミュニケーション能力」と比較して、本研究の提出した中国の日本語専攻大学生における異文化接触を持続するためのコミュニケーション能力には、次の3つの特筆すべき点がある。(1) 本研究で「対人関係構築能力」を取り上げたのは、中国の日本語専攻大学生が異文化接触の中で強い対人関係志向を持っていることを拠り所としている。また、「対人関係構築能力」の中では、話題の選択・継続に関する能力が重要視されるべきである。(2) 本研究は、「意思疎通をはか

るためのコミュニケーション能力」を提示し、日本語専攻大学生が異文化接触するときは、正しい外国語・外国語の使用という束縛から自らを解放し、意思疎通のほうがより重要であるという意識に切り替えることの重要性を主張した。(3) 本研究の提示している「異文化間能力」は、日中間における異文化間コミュニケーションに特化したものであり、文化一般性のほか、4点の文化特殊性が特定できる。①中国ホストの場合の日本語専攻大学生にとって、自文化知識の蓄積と自文化への気づき・認識が特に重要視されるべきである。②異文化間スキルを使用する際、柔軟的に摩擦に対応することやコンテクストを見極めて適切な判断をすることが重要である。これは、日中間の歴史問題によって日中間で互いが固定観念を持つこと、および、中国の日本語専攻大学生が接触の中で国家アイデンティティ・愛国心・民族自尊心を自覚することの両方に密接に関係している。③本研究で提示した「異文化間態度」には、歴史と現在・政治と国民間のコミュニケーション・一部の日本人と全体の日本人を切り分け、日中間の異文化間コミュニケーションを客観的に見ることや、批判的な意識を持って自国の文化現象を客観的に捉え、それによって相手の発言を客観的に認識・解釈することが内包されるべきである。④「異文化間能力」の構成要素間の関係に関して、「異文化間知識」が「異文化間スキル」や「異文化間態度」に影響することを確認した。

第7章では、研究課題の順番に沿って、各課題に対する答を述べ、そのうえで、本研究の独創性とその成果を確認し、さらに、中国の日本語教育改善への示唆を挙げ、最後に本研究の限界と今後の課題を提示した。

本研究の独創性とその成果に関しては、上記第3章、5章、6章において述べたもの以外、以下の2点を特記する。(1) 本研究は、動機づけ・不安・態度という情意的要素が中国の日本語専攻大学生における異文化接触に影響を与え、かつ、異文化接触を通してそれらの情意的要素が変容することを確認した。そのうち、態度の要素に関しては、異文化接触の中で、中国の日本語専攻大学生が「国家アイデンティティ」を自覚し、「愛国心」と「民族自尊心」を生じさせることを明らかにし、さらに、この3者の区別を試みた。(2) 日中間の異文化間コミュニケーションに生じる特定の異文化摩擦を発見し、その摩擦の生じる原因を掘り下げた。この異文化摩擦とは、中国の日本語専攻大学生が異文化接触の中で、日本人を「冷たい」とか「温情がない」とか認識し、それに葛藤を覚えて、接触の維持が難しいと感じることである。これは、「公」と「私」、および、「間」に関する対人関係構築の仕方が日中間で異なることに原因があると考えられる。

本研究から得られた、中国の日本語教育への示唆は、以下に列挙するようなものである。①「異文化間コミュニケーション能力」に対する定義を明確化し、人材育成の目標に方向性を示すことが望ましい。②大学や日本語学部からは、異文化接触のできる場づくりやチャンスの提供、および接触の場に対する後続支援というような支援が与えられる必要がある。③日本語教師には、コミュニケーション・アプローチを取り入れた教育を探究することや、異文化間コミュニケーションの情意的要素に関心を持つことなどが求められる。